

第3回講座

死を覚悟の救助捜索

200倍の救命患者対応

仙台市若林消防署員・小野寺さん

石巻赤十字病院看護師長・渋谷さん

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾第2期の第3回講座が16日、「捜索と救命」をテーマに仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。仙台市若林消防署警防課小野寺修さん(44)と石巻赤十字病院(石巻市)の看護師長渋谷多佳子さん(52)の2人が講師を務め、過酷な命の現場を振り返った。

小野寺さんは震災当時、若林消防署荒浜航空分署(総員35人)に在籍。津波襲来直後から被災者捜索と救助に当たった。「津波が押し寄せてきた時、地平線が上下に動くかのような激しさだった。家族や同僚はどうなったかと心配になったが、非常配備を受けて、強い使命感を持って浸水域に向かった」と振り返った。相次ぐ余震と津波に小野寺さんは死を覚悟しながら被災者を救助、震災翌日か

病院に患者や避難者が殺到した震災当時の様子を紹介しながら「命のとりで」となった状況を証言。「震災発生1週間で通常の200倍に当たる4181人の患者を受け入れた。電気や水道などのライフラインの復旧は比較的早かったが、それでも医療が間に合わず待機中に亡くなる患者もいた」と悔しさをにじませた。

渋谷さんは「発生が懸念されていた宮城県沖地震を想定しており、訓練や備蓄をしていた成果はあった。だが、医療従事者の被災や一般の避難住民は想定外だった」と指摘。「マニュアルは初期段階では役立つが、後は臨機応変に想像力を働かせた対応が大切になってくる。他人の経験や体

験にも関心を持って、自分の引き出しを増やしてほしい」と呼び掛けた。2人の講話後、受講生ら約80人はグループに分かれて討議。「救命、救急に携わる方たちの覚悟や使命感が伝わった」「防災では想像力がいかに重要か分かった」「次の災害に備え、記録し伝えていくことも必要だ」といった意見が出た。



がれきとなった家の中から生存者を探す消防隊員ら
2011年3月13日午後、仙台市若林区

受講生の声



避難訓練が大切
医療現場で訓練と災害時マニュアルが役立つと聞き、予測して準備することが重要だと認識しました。

後世の人のため対応を記録することも必要。まずは避難訓練の大切さを伝えなければ思いました。(仙台市青葉区・東北福祉大3年・亀岡美里さん・20歳)



過小評価は禁物
情報を過小評価しないことが大切だと知りました。救命現場では基本の構築が応用につながると聞き、日

々の積み重ねが重要だと思いました。今後は自分ならどう行動するか考えながら過ごしたい。(仙台市青葉区・東北大学院修士1年・山本修平さん・23歳)



葛藤の現場知る

災害時医療は、救命可能な命を最優先することを学びました。医療者も被災し、医療者、患者それぞれに

葛藤が生じることを知りました。現場に居合わせた際は葛藤を抱える人の気持ちを酌んで行動したい。(山形市・宮城教育大2年・今野桃子さん・19歳)

311 次世代塾

伝える／備える

第2期